

早稲田大学 政治経済学部
2021 年度 入試問題の訂正内容

<政治経済学部 一般選抜>

【総合問題】

●問題冊子 7 ページ : 1 2 選択肢ハ 2 行目

(誤)

～子どもを待つ・・・

(正)

～子どもを持つ・・・

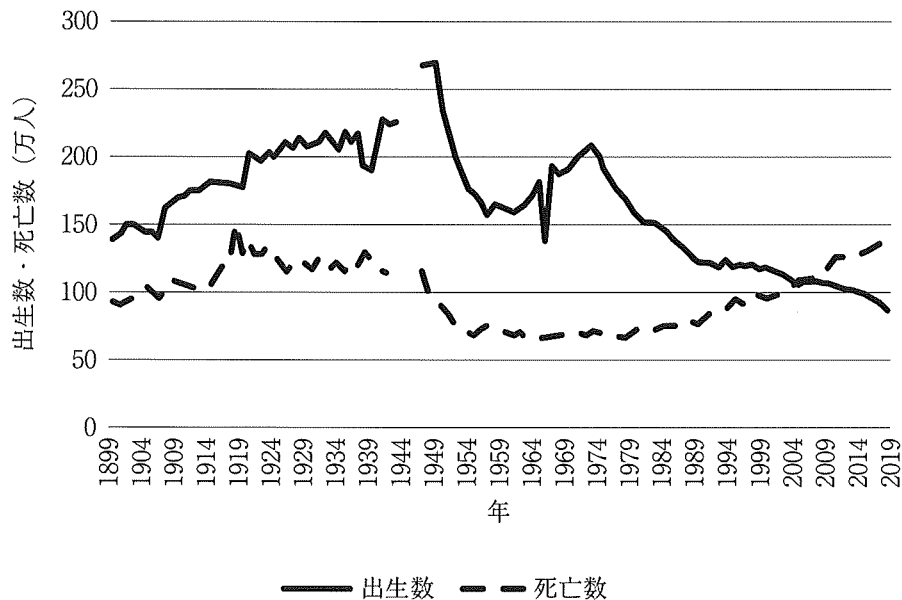
以上

I つぎの文章を読んで、下記の問い1～7に答えよ。(45点)

少子高齢化は、現在の日本が直面する喫緊の課題である。それは、国の政策においても重要な問題と位置付けられている。たとえば、少子化については、2003年に少子化社会対策基本法が公布・施行された。その前文には、少子化が社会における様々なシステムや人々の価値観と深くかかわっており、その解決のために、長期的な展望に立った不断の努力が必要であることが明記されている。高齢化については、1995年に高齢社会対策基本法が公布・施行された。その前文では、国民一人一人が生涯にわたって真に幸福を享受できるような社会を築き上げていけるように、雇用や年金、医療、福祉、教育、社会参加、生活環境などに関連する社会の仕組みを不断に見直すことが必要であると謳われている。以下では、日本における少子高齢化の現状と課題について概観する。

日本の出生数は減少し続けている。厚生労働省の人口動態統計(確定数)によると、2019年における日本の出生数は865,239人であった。同統計によってこれまでに公表された年間出生数が初めて90万人を下回った。日本の年間出生数は、第2次世界大戦終了直後のベビーブームの後いったん減少し、2度目のベビーブームにあたる1970年代前半に200万人を超えるまでに回復したものの、1975年以降はほぼ一貫して減少している(図1)。特に、2019年における前年からの出生数の変化率(-5.8%)は、2017年(-3.2%)と2018年(-2.9%)と比べて著しく低く、人口減少に拍車がかかったとも受け止められる。

図1 日本における出生数と死亡数の推移

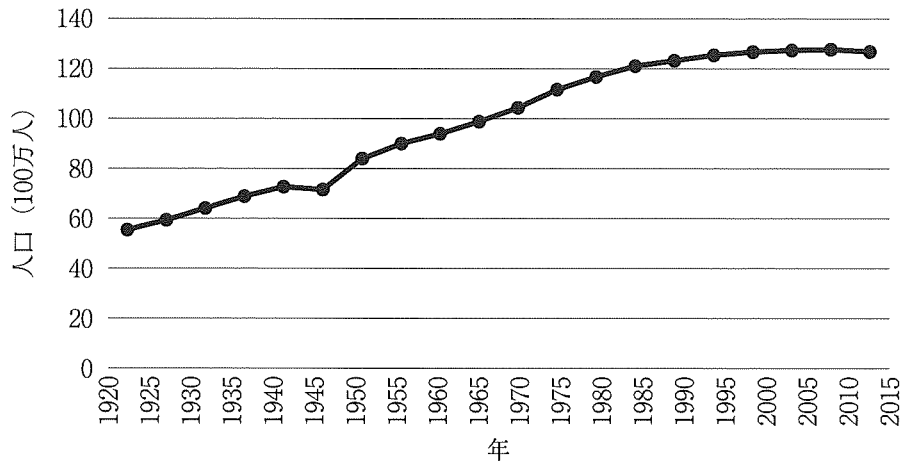


注：1944-1946年の統計は戦災による資料の喪失等による不備のため省略されている。
資料：厚生労働省「人口動態統計」(1899年から2019年までの調査)

出生数とは逆に、死亡数は増加している。医学の進歩に伴って平均寿命が延びてはいる。しかし、一般に高齢になるほど死亡率が高くなるので、近年の死亡数の増加は、人口の高齢化の結果でもある。1970年代中ごろにおける年間死亡数は約70万人であった。ところが、年間死亡数は1980年代前半から増加し始め、1990年に80万人を超え、1990年代後半に90万人よりも多くなり、2003年に100万人を超え、2005年には年間の出生数を上回った。年間死亡数はもうすぐ150万人に達する趨勢である(図1)。

一国の人口は、出生数と死亡数に応じて変化する。出生数や死亡数に比べて国際的な人口の移動数が僅少であると仮定すると、死亡数が出生数を上回れば一国の人口は減少する。実際、日本の人口は減少し始めている。総務省の国勢統計によれば、2015年調査における日本の人口は、2010年調査におけるそれに比べて減少した(図2)。国際的な人口の流入に大きな変化がなければ、出生数の減少と死亡数の増加が続くかぎり、日本の将来人口は減少していくことになる。

図2 日本の人口の推移



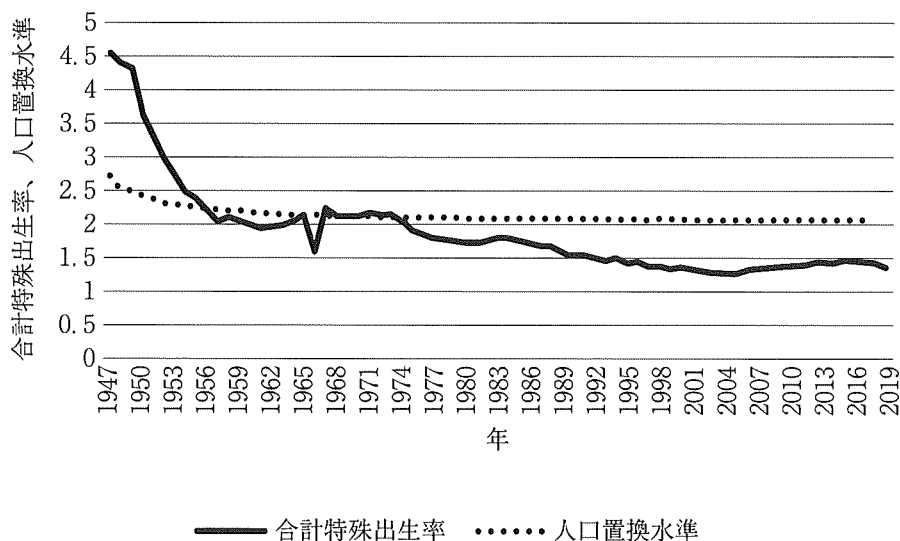
資料：総務省「国勢統計」（1920年から2015年までの調査。ただし、1945年のみ「昭和20年人口調査」による。）

人口減少の主因は、出生数の減少、すなわち少子化にある。出生数が減少すれば、相対的に高齢者の割合が高くなるのだから、少子化は高齢化の一因であるともいえる。では、日本の人口減少の到来は、いつごろから予想されていたのであろうか。

少子化を捉える指標として、合計特殊出生率（TFR）がよく用いられる。TFRは、15歳から49歳までの女性の年齢別平均年間出産数の合計で求められる。それは、しばしば、一人の女性が一生の間に産む平均的な子ども数と解釈される。

日本におけるTFRは、1947年における水準から急減した。具体的には、1947年のTFRが4.54であったのに対して、2019年のそれは1.36であった。現状の死亡の水準のもとで人口が長期的に増減せずに一定となる出生の水準、すなわち人口置換水準は、現在、2.06であると推定されている。大雑把に言えば、女性が一生のうちに平均的に二人よりも若干多く子どもを出産すれば、長期的に人口が一定に維持される。もし、TFRが人口置換水準を継続的に下回るならば、社会的移動によって人口が補われないかぎり、人口はやがて減少する。少子化が社会的な問題として注目され、実際に人口減少が始まったのは比較的最近になってからである。しかし、1974年以降、日本のTFRは人口置換水準を下回っていた（図3）。したがって、日本の人口が減少することは、かなり以前から予測されていたのである。

図3 日本における合計特殊出生率の推移



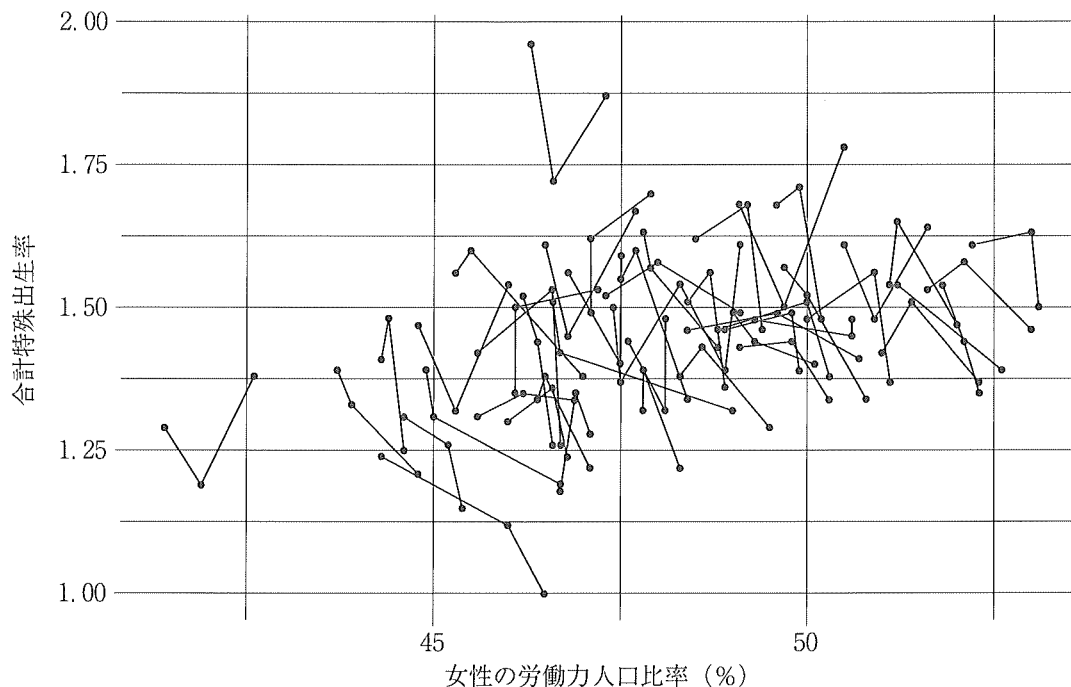
資料：厚生労働省「人口動態統計」（1947年から2019年までの調査）、国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2020年版」

経済の発展に伴ってTFRが減少する傾向は、諸外国にも見られる。そのような現象が生じることについての一つの説明は、経済が発展するほど女性の経済活動への参加機会が増え、就業しながら育児をすることの負担が大きいため、生涯に産む子どもの数が減るといえるものである。

日本についてこの点を検証するために、都道府県別のTFRと女性の労働力人口比率との関係を調べる。ここで労働力人口比率とは、15歳以上人口のうち、収入を伴う職に就業している者と収入を伴う職に就くべく職を探している者の合計が占める割合である。図4は、2005年、2010年、2015年における都道府県別TFRを縦軸に、都道府県別の女性の労働力人口比率を横軸にとった散布図である。都道府県別に3年分の観察値が線で結ばれている。図4は、全体的に見ると、女性の労働力人口比率が高くなるほど、TFRが高くなる傾向があることをあらわしている。

①

図4 都道府県別合計特殊出生率と女性の労働力人口比率（2005年、2010年、2015年）



注：同じ都道府県が線で結ばれている。

資料：総務省「国勢統計」（2005年から2015年までの調査）、厚生労働省「人口動態統計」（2005年、2010年、2015年調査）

では、実際のところ、日本の女性は現状の子ども数に満足しているといえるのだろうか。国立社会保障・人口問題研究所の出生動向基本調査（2015年）は、調査に選ばれた結婚している50歳未満の女性を対象に、理想とする子ども数と予定する子ども数を尋ねている。その結果が表1にまとめられている。表1によると、理想とする子ども数と予定する子ども数を比べた場合、② また、表2には、同じ女性を対象とした、今後持つつもりの子どもの数が実現できなかつればその原因として可能性が高そうなものについての回答の状況が示されている。表2によれば、

③

表1 理想の子ども数と予定する子ども数

子ども数	理想	予定
0	188	279
1	215	786
2	2,735	2,806
3	1,730	1,087
4	185	126
5以上	37	15
不詳	244	235
合計	5,334	5,334

資料：国立社会保障・人口問題研究所（2017）「第15回出生動向基本調査」

表2 今後持つつもりの子どもの数が実現できない原因として可能性の高そうなもの（多重選択）

番号	原因	回答数
1	収入が不安定なこと	290
2	自分や夫の仕事の事情	231
3	家事や育児の協力者がいないこと	163
4	保育所など子どもの預け先がないこと	158
5	今いる子どもに手がかかること	150
6	年齢や健康上の理由で子どもができないこと	602
7	その他	41
8	持つつもりの子供数を実現できない可能性は低い	140
	不詳	86
	総数	1,214
	非該当	4,120

注：多重選択とは、回答者が複数の項目を選択できる回答方式を指す。

資料：国立社会保障・人口問題研究所（2017）「第15回出生動向基本調査」

少子化の影響は地域によって異なる。端的に言えば、人口減少は、都市部よりも地方において急速に進む。日本全体の人口が減少した2010年から2015年にかけて、8都県では人口が増加し、その他の道府県では人口が減少した（表3）。総じて、首都圏など大都市近郊の地域における人口が増加し、そうでない地域における人口が減少した。

都市部よりも地方において人口が急速に減少することの一因は、高校や大学の卒業を機に、勉強や就業のために都市部に移住し、地元に戻らない若者が多いことにある。その結果、人口が減少した地域では働き盛りの若年者が少なくなり、相対的に高齢者が多くなる（表3）。就業する若年者が少なくなれば、その地域の税収は減少する。他方で、高齢者が広範囲に居住するので、高齢者に必要な行政サービスを提供するための費用が必要になる。その結果、人口減少が著しい地域の財政ほど、歳出が歳入を超過しやすくなり、国庫支出金などの、地域外からの財政補助に頼らざるを得なくなる。このことは、人口減少が深刻でない地域においても、人口減少によって経済的な負担が増すことを意味する。

表3 都道府県別人口変化率（2010年から2015年）と65歳以上人口比率（2015年）

都道府県	人口変化率 (%)	65歳以上人口比率 (%)	都道府県	人口変化率 (%)	65歳以上人口比率 (%)	都道府県	人口変化率 (%)	65歳以上人口比率 (%)	都道府県	人口変化率 (%)	65歳以上人口比率 (%)
北海道	-2.3	29.0	東京都	2.7	22.2	滋賀県	0.2	23.9	香川県	-2.0	29.3
青森県	-4.7	29.9	神奈川県	0.9	23.6	京都府	-1.0	26.9	愛媛県	-3.2	30.1
岩手県	-3.8	30.2	新潟県	-3.0	29.7	大阪府	-0.3	25.8	高知県	-4.7	32.5
宮城県	-0.6	25.2	富山県	-2.5	30.3	兵庫県	-1.0	26.8	福岡県	0.6	25.6
秋田県	-5.8	33.6	石川県	-1.3	27.5	奈良県	-2.6	28.5	佐賀県	-2.0	27.5
山形県	-3.9	30.6	福井県	-2.4	28.3	和歌山県	-3.9	30.7	長崎県	-3.5	29.4
福島県	-5.7	28.3	山梨県	-3.3	28.1	鳥取県	-2.6	29.5	熊本県	-1.7	28.6
茨城県	-1.8	26.5	長野県	-2.5	29.8	島根県	-3.2	32.1	大分県	-2.5	30.2
栃木県	-1.7	25.8	岐阜県	-2.3	27.9	岡山県	-1.2	28.1	宮崎県	-2.7	29.3
群馬県	-1.7	27.4	静岡県	-1.7	27.6	広島県	-0.6	27.2	鹿児島県	-3.4	29.1
埼玉県	1.0	24.6	愛知県	1.0	23.5	山口県	-3.2	31.9	沖縄県	2.9	19.4
千葉県	0.1	25.5	三重県	-2.1	27.6	徳島県	-3.8	30.6			

注：人口変化率は、2015年の人口Yと2010年の人口Xとの差をXで除した値 $(Y - X) / X$ をパーセントで表示したものである。

資料：総務省「国勢統計」（2010年調査、2015年調査）

少子化は、人口の構成だけでなく、世帯の構成にも大きな影響を及ぼす。表4は、1985年から2015年にかけての世帯人員数別世帯数、すなわち、世帯人員数の分布をあらわす。表4から、④ 少子化によって平均的な世帯人員数が減少するとともに、世帯規模の分布も急激に変化している。

表4 世帯人員数別世帯数

(単位：1万)

年	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人以上	総数
1985	789	699	681	899	420	198	84	3798
1990	939	837	735	879	381	190	81	4067
1995	1124	1008	813	828	351	171	73	4390
2000	1291	1174	881	792	317	145	59	4678
2005	1446	1302	920	771	285	121	47	4906
2010	1678	1413	942	746	257	98	36	5184
2015	1842	1488	936	707	240	81	28	5333

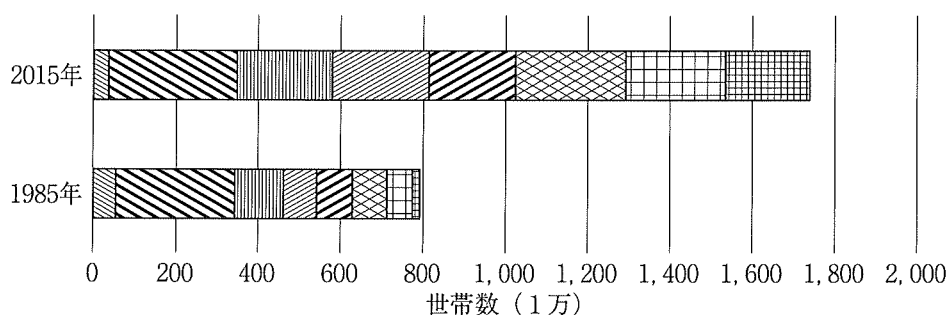
注1：この表における世帯数は、総務省「国勢調査」で定義される一般世帯数をあらわす。

注2：総数には、世帯人員数不詳の世帯も含む。

資料：総務省「国勢統計」(1985年から2015年までの調査)

世帯人員1人の単独世帯の中身も大きく変化している。1985年においては、単独世帯の世帯主の6割近くが40歳未満であった。なかでも、20代の世帯主の構成比がもっとも高く、全体の約36%を占めていた。ところが、2015年においては、単独世帯の世帯主の7割近くが40歳以上であり、70歳以上の世帯主の割合が3割近くに達している。より正確には、20代・30代の一人暮らしの数は増加したのだけれども、それを凌駕する勢いで、高齢単独者世帯の数が増加したのである(図5)。つまり、今から35年ほど前は、一人暮らしの多数派は若年者であったけれども、現在では高齢者の割合が急上昇している。

図5 世帯主の年齢階級別単独世帯数



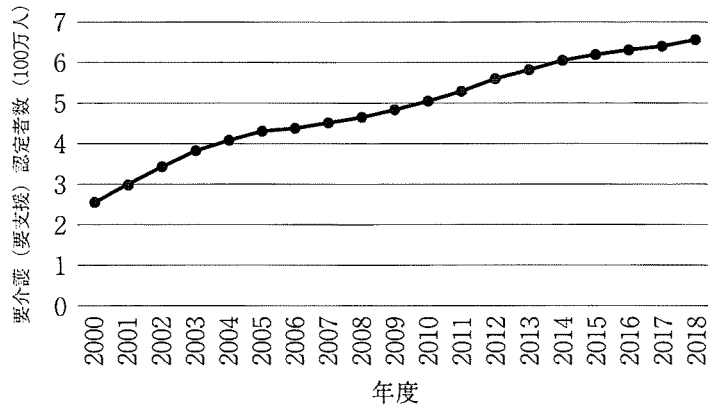
■10歳代 ■20歳代 ■30歳代 ■40歳代 ■50歳代 ■60歳代 ■70歳代 ■80歳以上

注：世帯主の年齢不詳を除く。

資料：総務省「国勢統計」(1985年調査、2015年調査)

出生の減少と高齢者の増加が同時に進行した結果、日本の高齢化は急速に進んでいる。高齢者の増加は、生活の支援を必要とする人々が増加することを意味する。実際、2000年以降の要介護(要支援)認定者数は年々増加している(図6)。ここで、要介護状態とは、寝たきりや認知症などにより常時介護を必要とする状態を指す。また、要支援状態とは、家事や身支度等の日常生活に支援が必要であり、特に介護予防サービスが効果的な状態を指す。要介護(要支援)認定者数は、要介護認定者と要支援認定者の合計である。第1次ベビーブーマーが後期高齢者となる今後は、要介護や要支援の認定者数がさらに多くなると予想される。核家族化と高齢の単独世帯の増加が進む中で、高齢者が必要とする生活の支援をどのように提供していくかは、日本の大きな課題である。

図6 要介護（要支援）認定者数



資料：厚生労働省「介護保険事業状況報告」（各年）

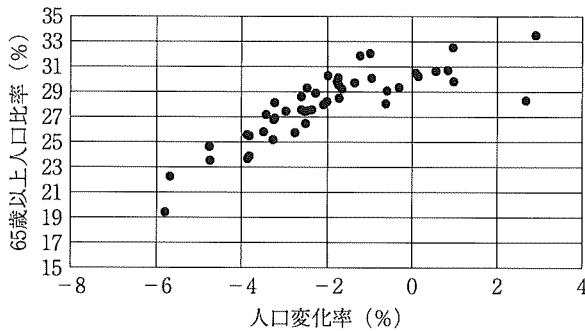
- 1 文中の ① に入る文章として最も適切なものを1つ選び、マーク解答用紙にマークせよ。
- イ) したがって、少子化を避けるべく合計特殊出生率を上昇させるためには、経済活動への女性の参加を促進することが効果的である。たとえば、女性管理職を積極的に増やすなど、経済活動において女性が責任と権限を持つ機会をこれまでよりも多く設けるようにすべきである。
- ロ) ただし、両者の相関はそれほど強くない。したがって、合計特殊出生率を上昇させるためには、女性の就業を促す方策だけでは不十分であり、他の政策と組み合わせる必要がある。たとえば、経済的理由のために結婚を躊躇する若者に補助金を支給して有配偶率を高めるなどの施策を、就業機会の促進に追加すべきである。
- ハ) とはいえ、両者の相関が極めて弱いので、女性の就業と関連付けて合計特殊出生率を上昇させようとする政策は有効でない。むしろ、両者が独立していることを前提に合計特殊出生率の向上を目指す政策を施行すべきである。たとえば、出産だけに着目して、不妊治療に伴う費用の軽減を図るために助成金を支給する。
- ニ) しかし、都道府県別に見ると、両者がおおよそ負の相関を持つことが分かる。すなわち、地域ごとに見れば、経済活動に参加する女性の比率が高いほど、合計特殊出生率が低いという傾向が確認できる。このことは、就業が出生を抑制する効果を持つ証拠とも解せる。したがって、女性の経済活動への参加を促しながら少子化を避けるためには、就業する女性の育児負担が重くならないように対策を講じる必要がある。たとえば、託児施設をより充実すべきである。
- 2 文中の ② に入る文として最も適切なものを1つ選び、マーク解答用紙にマークせよ。
- イ) 予定する子ども数の方が理想の子ども数よりも多い傾向がある。つまり、現状において、希望よりも多くの子供を持っていないと回答した人が、その反対と答えた人よりも多い。
- ロ) 予定する子ども数と理想とする子ども数は釣り合っている。つまり、ほとんどすべての回答者について、希望する子ども数と理想とする子ども数が一致している。
- ハ) 予定する子ども数の方が理想の子ども数よりも少ない傾向がある。つまり、条件を整えばもっと多くの子どもを欲しいと思っていながら、実際にはそれよりも少ない子どもを待つ予定であると回答した人が、その反対と答えた人よりも多い。
- ニ) 回答の散らばりが大きいので、回答者の理想とする子ども数と持つ予定である子ども数の傾向について判断できない。

3 表2が多重選択（ひとりの回答者が複数の選択肢を回答できる方式）であることに注意して、文中の ③ に入る文として最も適切なものを1つ選び、マーク解答用紙にマークせよ。

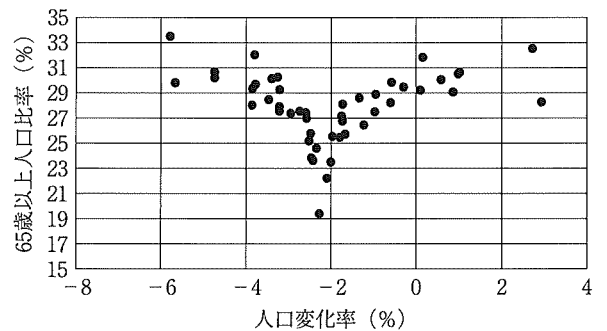
- イ) 保育所など子どもの預け先がないこと、今いる子供に手がかかることを理由に、今後希望どおりの子ども数を実現できないとする回答者の人数は308人である。
- ロ) 非該当を除く回答者の約半数が、今後持つつもりの子どもの数を実現できない原因となりそうなものとして、年齢や健康上の理由を挙げている。
- ハ) 収入が不安定なことを理由としてあげた回答者のうち、年齢や健康上の理由で子どもができないことも理由として挙げた回答者数は145人程度と推測される。
- ニ) 今後持つつもりである子ども数を実現できらうとする回答者が、非該当を除く回答者数の8%程度を占めている。

4 表3から、2015年における都道府県別65歳以上人口比率（%）を縦軸に、2010年から2015年までの都道府県別人口変化率（%）を横軸にした散布図として最も適切なものを1つ選び、マーク解答用紙にマークせよ。

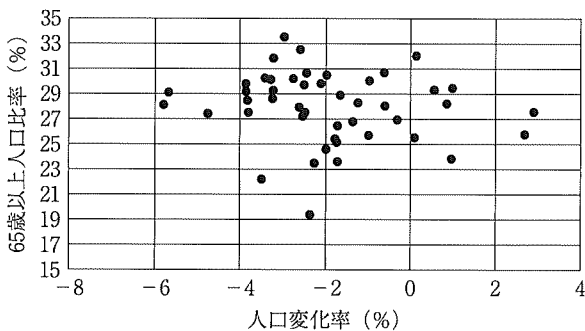
イ)



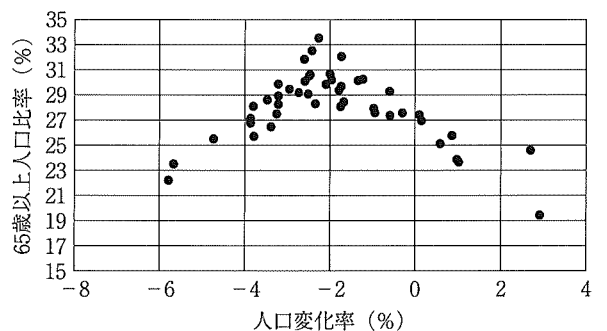
ロ)



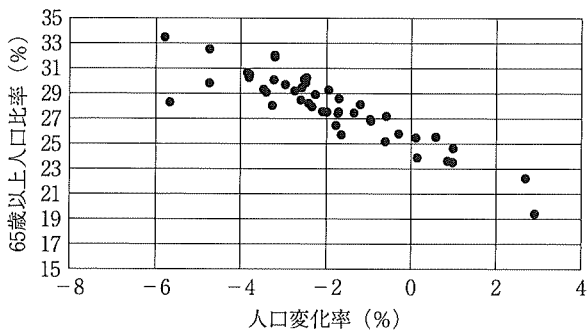
ハ)



ニ)



ホ)



- 5 文中の ④ に入る文として最も適切なものを1つ選び、マーク解答用紙にマークせよ。
- イ) 2010年から2015年にかけて、人口が減少したために世帯総数も減少した。
 - ロ) 1985年において最も多かった4人世帯は、2000年まで3人世帯よりも多かった。
 - ハ) 1990年以降、各調査年における世帯人員数の分布の中で単独世帯は最も多くなった。
 - ニ) 1985年から2015年にかけて、2人世帯と3人世帯はどちらも増加し続けた。
 - ホ) 1985年から2015年にかけて5年ごとにみた場合、世帯総数に対する4人以上世帯の構成比が上昇したことがあった。
- 6 図5には、1985年から2015年にかけて、70歳以上の単身者が大幅に増加したことが示されている。この要因に関して、問題文の図表から判断できる事柄として、最も適切なものを1つ選び、マーク解答用紙にマークせよ。
- イ) 1985年の40歳代の単独世帯の世帯主の多くが、結婚することなく2015年に単独世帯の高齢世帯主となった。
 - ロ) 少子化のために若者が減少した上に、彼らが就学・就業のために都市部に移動したまま出身地に戻らなくなったため、独り暮らしをする高齢者が増えた。
 - ハ) 女性の労働力人口比率が上昇するにつれて、晩婚化と少子化が進み、単独世帯における高齢の世帯主が増加した。
 - ニ) 男性に比べて女性の長寿化が急速に進んだため、高齢者の単独世帯化が進んだ。
- 7 高齢者の生活を支援するのにあなたが有効と考える政策は何か。本文の図表を適宜用いながら、その政策がなぜ有効かという理由とともに、記述解答用紙①に200字以内で記せ。

II Read this extract from “Ethics Across the Species Boundary” by Peter Singer (Chapter 9 in *Global Ethics and Environment*, edited by Nicholas Low) and answer the questions below. (40点)

Here is a very brief summary of a position that I have defended on many occasions, most fully in my book *Animal Liberation*. Our present treatment of animals is based on speciesism; that is, a bias or prejudice towards members of our own species and against members of other species. Speciesism is an ethically indefensible form of discrimination against beings on the basis of their membership of a species other than our own. All sentient beings¹ have interests, and we should give equal consideration to their interests, regardless of whether they are members of our species or of another species.

My aim in this chapter is to defend this position and explain why I hold to it, despite criticisms both from those who seek to defend a speciesist ethic and from those who think that the kind of ethic I hold does not go far enough. It is the latter criticism, in particular, that I address here. While animal liberationists and deep ecologists agree that ethics must be extended beyond the human species, they differ in how far that extension can meaningfully go. If a tree is not sentient, then it makes no difference *to the tree* whether we chop it down or not. It may, of course, make a great difference to human beings, present or future, and to non-human animals who live in the tree or in the forest of which it is a part. Animal liberationists would judge the wrongness of cutting down the tree in terms of the impact of the act on other sentient beings, whereas deep ecologists would see it as a wrong done to the tree, or perhaps to the forest or the larger ecosystem². I have difficulty in seeing how one can base an ethical decision on wrongs done to beings who (A) to experience in any way the wrong done to them or any consequences of those wrongs. So hereafter I will be concerned with a position based on consideration of the interests of individual sentient beings.

In any serious exploration of environmental values a central issue will be whether there is anything of intrinsic value beyond human beings. To explore this question we first need to understand the notion of “intrinsic value.” Something is of intrinsic value if it is good or desirable *in itself*. The contrast is with “instrumental value,” value as a means to some other end or purpose. Our own happiness, for example, is of intrinsic value, at least to most of us, in that we desire it for its own sake. Money, on the other hand, is only of instrumental value to us. We want it because of the things we can buy with it, but if we were abandoned on a desert island we would not want it. (Whereas happiness would be just as important to us on a desert island as anywhere else.)

Now consider any issue in which the interests of human beings clash with the interests of non-human animals. Since we are here concerned especially with environmental issues, I'll take as an example Australia's kangaroo industry, which is based on killing free-living kangaroos in order to profit from the sale of their meat or skins. As a community, Australians must decide whether to allow this industry to exist. Should the decision be made on the basis of human interests alone? For simplicity, I shall assume that none of the species of kangaroos shot is in danger of disappearing from the face of the earth. The issue therefore is one about whether, and to what extent, we (B). So immediately we reach a fundamental moral disagreement—a disagreement about what kinds of beings ought to be considered in our moral discussions. Many people think that once we reach a disagreement of this kind, argument must cease. I am more optimistic about the scope of rational argument in ethics. In ethics, even at a fundamental level, there are arguments that should convince any rational person.

Let us take a parallel example. This is not the first time in human history that members of one group have placed themselves inside a circle of beings who are entitled to moral consideration, while excluding another group of beings, who are like themselves in important respects, from this sacred circle of protection. In ancient Greece, those who the Greeks called “barbarians”³ were thought of as “living instruments”—that is, human beings who were not of intrinsic value but existed in order to serve some higher end. That end was the welfare of their Greek owners. To overcome this view required a shift in

our ethics that has important similarities with the shift that would take us from our present speciesist view of animals to a non-speciesist view. Just as in the debate over equal consideration for non-human animals, so too in the debate over equal consideration for non-Greeks, one can imagine people saying that such fundamental differences of ethical outlook were not open to rational argument. Yet now, looking back, we can see that in the case of the institution of slavery in ancient Greece, that would not have been correct.

Notoriously, one of the greatest of Greek philosophers justified the view that slaves are “living instruments” by arguing that barbarians were less rational than Greeks. In the hierarchy of nature, Aristotle said, the purpose of the less rational is to serve the more rational. Hence it follows that non-Greeks exist in order to serve Greeks. No one now accepts Aristotle’s defense of slavery. We reject it for a variety of reasons. We would reject his assumption that non-Greeks are less rational than Greeks, although, given the cultural achievements of the different groups at the time, that was far from being an absurd assumption to make. But more importantly, from the moral point of view we reject the idea that the less rational exist in order to serve the more rational. Instead we hold that all humans are equal. We regard both racism and slavery based on racism as wrong because they fail to give equal consideration to the interests of all human beings. This would be true whatever the level of rationality or civilization of the slave, and therefore Aristotle’s appeal to the higher rationality of the Greeks (C). Members of the “barbarian” tribes can feel pain, as Greeks can; they can be joyful or miserable, as Greeks can; they can suffer from separation from their families and friends, as Greeks can. To push aside these needs so that Greeks could satisfy much more minor needs of their own was a great wrong and a stain on Greek civilization. This is something that we would expect all reasonable people to accept, as long as they can view the question from a neutral perspective and are not inappropriately influenced by having a personal interest in the continued existence of slavery.

Now let us return to the question of the moral status of non-human animals. In keeping with the dominant Western tradition, many people still hold that all the non-human natural world has value only or mainly insofar as it benefits human beings. A powerful objection to the dominant Western tradition turns against this tradition an extended version of the objection just made against Aristotle’s justification of slavery. Non-human animals are also capable of feeling pain, as humans are; they can certainly be miserable, and perhaps in some cases their lives could also be described as joyful; and members of many mammalian species like dogs, horses, and pigs can suffer from separation from (D). Is it not therefore a stain on human civilization that we push aside these needs of non-human animals so as to satisfy minor needs of our own?

It might be said that the morally relevant differences between humans and other species are greater than the differences between different races of human beings. Here, by “morally relevant differences” people will have in mind such things as the ability to reason, to be self-aware, to act independently, to plan for the future, and so on. It is no doubt true that, on average, there is a marked difference between our species and other species in regard to these capacities. But this does not hold in all cases. Dogs, horses, pigs, and other mammals are better able to reason than newborn human infants or humans with profound intellectual disabilities. Yet we grant basic human rights to all human beings and deny them to all non-human animals. In the case of human beings we can see that pain is pain, and the extent to which it is intrinsically bad depends on factors like its duration and intensity, not on the intellectual abilities of the being who experiences it. We should be able to see that the same is true if the being suffering the pain is not of our species. There is no justifiable basis for drawing the boundary of intrinsic value around our own species. (E). How, then, are we to object to those who wish to disregard the interests of members of other races because they are also not members of our own group?

The argument I have just offered shows that while the dominant Western tradition is wrong on the vital issue of how we ought to regard non-human animals, this same tradition has within it the tools—in its recognition of the role of reason and argument—for constructing an extended ethics that reaches

beyond the species boundary and addresses the human-animal relationship. There is no objection of principle to this extension. The principle that must apply is that of equal consideration of interests. The remaining difficulties are about exactly how this principle is to be applied to beings with lives—both mental and physical—that are very different from our own.

Whereas I have defended the ethic of animal liberation by placing it within the broad framework of the Western tradition, some people see that tradition as precisely the problem. They argue that it is the Western tradition that is responsible for a civilization that has, for the first time in history, changed the climate of our planet, put a hole into the ozone layer, and caused species to disappear from the face of the earth at an extraordinary rate.

From a historical perspective, there is no denying the truth of these claims, but we need to look forward, not backward. The real issue is what approach offers the best chance of getting us out of the mess we are in. Ironically, the environmental crisis is so grave that there is no problem in using quite a conventional ethic to argue for a radically different attitude to the environment. In many respects, even a traditional ethic limited to human beings would be sufficient. One could, entirely within the limits of the dominant Western tradition, oppose the mining of uranium on the grounds that nuclear fuel, whether in bombs or power stations, is so damaging to human life that the uranium is better left in the ground. Similarly, many arguments against pollution, the use of gases harmful to the ozone layer, the burning of fossil fuels, and the destruction of forests could be formulated in terms of the harm to human health and welfare from the pollutants or the changes to the climate that may occur as a result of the use of fossil fuels and the loss of forest. The fate of peasant farmers on low-lying lands in the delta regions of Bangladesh and Egypt may depend on whether citizens of the wealthy nations put a restraint on their greenhouse gas emissions. Even allowing for some uncertainty about the link between these gases and global warming, (F)—on the one hand, the survival of 40 million people; on the other, such changes as restrictions on the use of private vehicles or cutting our consumption of animal products produced by modern energy-intensive farming methods—is so great that there can be no doubt about the ethical course to take.

¹“Sentient beings” are beings that are capable of feeling things through physical senses.

²An “ecosystem” is a geographic area where plants, animals, and other organisms, as well as weather and landscapes, work together to form a bubble of life.

³In former times, “barbarians” were people from other countries who were thought to be uncivilized and violent.

Adapted from “Ethics Across the Species Boundary” by Peter Singer in Global Ethics and Environment, edited by Nicholas Low, Routledge, 1999, pp. 146-157.

- 1 Choose the most suitable answer from those below to fill in blank space (A).
 - (a) are going
 - (b) are unable
 - (c) do not want
 - (d) ought not
 - (e) would like

- 2 Choose the most suitable answer from those below to fill in blank space (B).
 - (a) consider the interests of individual non-human animals
 - (b) find environmental issues a matter of concern in Australia
 - (c) put the instrumental value of kangaroos above that of other animals
 - (d) understand the difference between animal liberationists and deep ecologists
 - (e) value the continued existence of the kangaroo industry

- 3 Choose the most suitable answer from those below to fill in blank space (C).
- (a) would have justified the enslavement of non-Greeks even if it had been false
 - (b) would have justified the enslavement of non-Greeks even if it had been true
 - (c) would not have justified the enslavement of non-Greeks even if it had been false
 - (d) would not have justified the enslavement of non-Greeks even if it had been true
- 4 Choose the most suitable answer from those below to fill in blank space (D).
- (a) human civilization
 - (b) intrinsic value
 - (c) liberationists
 - (d) their family groups
 - (e) their owners
- 5 Think of a suitable sentence for blank space (E). Write your answer **in Japanese** on your written answer sheet (記述解答用紙①), using no more than 25 characters in each of the boxes (1) and (2).
- 6 Choose the most suitable answer from those below to fill in blank space (F).
- (a) the benefit to peasant farmers
 - (b) the difference between developing and developed countries
 - (c) the imbalance in the interests at issue
 - (d) the impact of the destruction of forests on human life
 - (e) the likelihood of the wealthy nations seriously damaging the environment
- 7 With which of the following statements would the writer most likely **disagree**?
- (a) It is a strategic error for environmentalists to appeal to a conventional Western ethic.
 - (b) It is possible to offer rational arguments about the interests of non-human animals that would persuade both deep ecologists and speciesists.
 - (c) The life of a kangaroo in Australia is of intrinsic value, as it is good or desirable in itself.
 - (d) The practice of humans eating non-human animals in developed countries is also a form of speciesism.
 - (e) The principle of equal consideration of interests may apply to dogs and horses, even though their lives are different from those of humans.

- III Read the statement below and write a paragraph giving at least two reasons why you agree or disagree with it. Write your answer in English in the box on your written answer sheet (記述解答用紙②). (15点)

“Peaceful protests should not turn violent
even if protesters feel that their voices are being ignored.”

[END OF TEST]